

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主論文の要旨

論文題目 近代日本・中国における女性同性愛
—性科学の受容から 1920 年代女性主体表現まで—

氏名 鄒韻

論文内容の要旨

要旨

本論文は近代日本と近代中国における「同性愛」概念の浮上に着目し、性科学・言説・文学において女性同性愛がいかに関与されるのかを明らかにしようとする試みである。とりわけ、明治末期から大正期にかけての日本、そして 1920 年代の中国を中心に、性科学の浸透による「同性愛」をめぐる言説、及び女同士の愛を描く女性作家の文学テキストに目を向けて、これまでアカデミズムで数多くなされてきたセクシュアリティの歴史研究とレズビアン文学研究の一つとして本論を位置付けたい。

本論文の問題設定は以下の三点に分けられる。

- 一、ヨーロッパの「同性愛」をめぐる性科学は、医者や弁護士をはじめとする人々が同性愛の犯罪化に抗する理論として位置付けられるが、それに対し、同性間の性行為が文化的にタブー視されていなかった近代日本と中国においては、西洋からの性科学はいかなる「知」として導入され、位置付けられていたのか。(第一部第一章・第二部第一章)
- 二、「女性同性愛」の問題化と語られる女学生の同性愛事件の可視化である。具体的には、なぜ日本語と中国語の「同性愛」という言葉は、最初に女性同士の親密な関係を指し示すものとして浮上してきたのだろうか。(第一部第二章・第二部第二章)
- 三、文学研究において下位文化とされてきた女同士の絆を語る文学テキストの読み直しを

通して、1920年代の女性たちの主体表現を掬い上げる。(第一部第三章、第四章・第二部第三章、第四章)

明治末期の日本では、ドイツ圏に留学していた知識人たちがクラフト＝エビングの『性的精神病質』(Psychopathia Sexualis)を当時の日本医学界に紹介した。同性愛の病理化の始まりを示すこの本は、正統的な西洋医学として位置付けられていたと見られる。一方で、1920年代の中国にはクラフト＝エビング論をはじめとする性科学があまり注目されず、むしろ社会主義者エドワード・カーペンターの著作が知識人の間に大きな影響を与えていた。全体的に見て、近代日本ではクラフト＝エビングの理論の受容により同性愛の医学的な基礎が築かれた一方、近代中国の知識人たちは、医学的まなざしからの同性愛問題よりも、社会制度の改革としての同性愛問題に関心を持っていた。このように、日本語の「同性愛」を借用した中国語の“同性愛”という言葉は、文字上の意味の類似に留まるだけで、原語にあった構造的な医学の知識体系は空疎であったと考えられる。

このような性科学の受容を踏まえて、本論文は近代の日本と中国における性科学の役割の一つを新しい女のセクシュアリティを管理する知として位置付けた。1920年代の日本と中国では、「同性愛」という言葉の浮上は女学生の登場、そして女学校における女同士の親密な関係と関わっている。だが、近代日本では性科学の浸透により同性愛は教育問題にとどまらず医学によって解決すべき問題になっていった。それに対し近代中国では、医学的言説の借用はみられるものの、医学の介入は期待されていなかったことが窺える。

最後に、このような女性同性愛が語られる歴史の中で、女性作家たちはどのように主体表現をしたのかを考察した。本論文が最初に注目したのは、日本近代文学における吉屋信子の執筆活動である。吉屋信子(1896-1973)は、女同士の絆を語り続けた女性作家の一人である。少女小説家として世間に広く名が知られる吉屋は、これまで少女小説のバイブルと評価されてきた『花物語』、そして後の自伝小説等においてどのように同性愛を表現したのかを考察した。まず、第一部第三章において、既存のジェンダーの制度内に収まる少女小説と過小評価されてきた『花物語』における作家・テキスト・読者という三者の力学の問題を論じた。第一部第四章においては、新たな語りの場を探っていた時期の吉屋の作品『屋根裏の二処女』(1920年)と「或る愚しき者の話」(1925年)に注目し、性科学を受容した同性愛の主体成立の出発点と

して再評価を行った。吉屋信子の初期の執筆活動を日本の大正期における女同士の愛をめぐる女性の主体表現として位置付けられるだろう。

第二部第三章では、近代中国女性文学の中、非常に早い時期に女同士の連帯の問題を提示した女性作家の廬隠（1899－1935）の執筆活動に注目した。具体的には、廬隠の短編小説集の『海濱故人』（1925年）を中心に、彼女の初期創作における自己語りの変容を考察した。民族・社会問題からフェミニズムの声を解放し、女である主体の語りを探りつつあった先駆者として廬隠を再評価したい。第二部第四章では、近代中国における女性同性愛をめぐる様々な回想録を発掘し、当事者たちはどのように思い出としての「女性同性愛」を語ったのかを考察した。1920年代では、女同士の「同性愛」はすでに過ぎ去った美しい思い出として語られる。だが、1930年代に入ると、革命思想の風が激しく吹き、女同士の「同性愛」は女学生時代の未熟で荒唐無稽な行為とされ、成長に有害であると語られるようになった。

以上の通り本論は性科学・言説・文学の考察を通して、近代日本・中国における性科学の受容の過程及び新しい女のセクシュアリティを管理する知としての性科学の役割を明らかにした。1920年代、女同士の愛が批判された言説が流通した。このような言説に抗して、女性作家たちは女同士の絆をめぐる多様な主体表現を発信し続けていた。